



私の闘病記

大澤 由佳

きっかけは数か月間続く舌炎でした。ようやく重い腰をあげ内科受診してから、事態は急変しました。その数か月後には子宮と卵管の摘出手術をすることになったのです。子宮腺筋症という病気でした。私はこのとき43歳、2年前に結婚。子どもはいません。貴重な、そして面白い体験だったと思うので、病気の発覚から入院・手術、退院後の状況や心情などを綴ります。この体験が身近なことである女性だけでなく、男性にも理解して読んでもらえるといいなと思います。

《原因》

2月中旬。年末からの治らない舌炎のため内科を受診。血液検査の結果、治療が必要なほどの酷い貧血であることが分かった。貧血の原因は生理？最近、経血の量が増え、日中に大きくて長い『夜用』のナプキンを使うようになっていた。(ナプキンには経血量に応じて多種多様なものがある。男性には一度、身近な女性と共に生理用品売り場を見てきてもらいたい。生理の貧困への理解度が上がるはず)。さらに生理痛が酷く、生理2日目の夜には痛さのあまりベッドでうずくまり、うんうん唸っていた。それでも閉経近くなるとそれまでとは変わると聞いていたので、あまり気にかけていなかった。そもそも、生理痛が酷い、経血の量が多い、などというのは客観的な比較ができず分からないのだ。

《婦人科受診》

3月中旬、婦人科を初受診。問診票を渡された。問診票は他の医療機関でもあるが、特異なのは、妊娠・出産の有無、直近の生理日・期間、初潮年齢、性交渉経験の有無まで問われること。

医師との問診後、視診、内診、超音波、子宮頸がん検査。「ズボンとパンツを脱いで、このタオルで前を隠してそこに座って」。どこに座るのか分からないような形状の検査の椅子に座る。天井から腰の上あたりまでカーテンで仕切られており、患者からは看護師や医師の姿は見えないようになっている。「今は不安定な体勢だけど、検査の時に椅子

子の高さを上げると安定するから。先生が来たら脚を開いて」。直ぐに医師が来たらしく、椅子が上がった。座面も足をのせているところも不安定で体をどう預けていいのかわからない。「お尻を椅子につけちゃって。その方が痛くないから」。痛いのとは少し違う気がするが、体内に何か入ってきて気持ち悪い。どうやったらお尻がつくのか全く頭が回らない。

内診後再び医師の診察。「子宮筋腫が大きい。これは生理の時に血がいっぱい出るよ」「そうなんですか」。それくらいしか返事ができない私には気を留めずに医師は話を進めた。「治療方法の1つ目は手術。妊娠を望むなら筋腫だけ、そうでなければ子宮全摘出。2つ目は服薬。生理を止める薬を飲んで…」「メリット、デメリットはなんですか?」。手術か否かと言われ、やっとの思いで私は言った。「手術となれば切腹だから…でも生理がなくなって楽よ～」その後も医師は治療法の説明などを続ける。「決断は直ぐにしなくてはならないんですか?」「手術するにしても貧血が治ってからだから、3か月後くらいかな。どちらにしろ生理を止めないと貧血は治らないから…。生理を止めるのに注射と服薬、どちらがいい?飲み薬は1か月約9,000円、注射は1回約5,000円、4週に1回」「注射でお願いします」。生理を止める薬は、副作用として更年期のような症状が出るという。婦人科受診初日は精神的にも金銭的にも負担が大きかった。

後日のMRI検査の結果は子宮筋腫あるいは子宮腺筋症。子宮摘出手術を受ける決断をして日赤病院を紹介してもらった。予定では、入院期間1週間、入院翌日に手術。腹腔鏡下膣式子宮全摘術、両側卵管摘出術。手術時間は約3時間。

《入院》

5/24 午後入院。病室に入ると氏名、生年月日、QRコードが印字されたタグを腕に捲かれた。このQRコードには、患者情報が入っているらしく、看護師がスマホで読み取ると、病室のディスプレイに私の名前、歩行・トイレの自立、担当医の名な

どが表示された。断続的に看護師がやってきては血圧測定や採血をし、書類やこれからの説明を気忙しくしていく。4 人部屋だが、一人のスペースは4 畳程度と広く、コロナ禍ということもあり皆カーテンを閉めているので、余計な気遣いをせずに済んだ。夜、隣のベッドに産後の患者が来たらしく、看護師との会話が聞こえた。自分は出産を経験することなく、翌日には子宮摘出。自分の子宮は使われることはなかったと感傷的になった。21 時消灯。あまりよく眠れなかった。

《手術》

5/25 手術。起床後、術前食を食べる。小さなパン2 つにジャム、ゼリー、飲み物。シャワーを浴びて手術着に着替え、点滴の為の管を入れるともうすることはない。看護師から手術は4 番目なので、午後何時になるかまだ分からないと告げられた。お昼になったが、まだ声がかからない。お腹は空くし、頭は痛くなってくるし、落ち着かない。13:20、ようやく看護師が来た。「13:45 に迎えに来るので、一緒に手術室へ行きましょう」。家族に連絡した。血栓予防の弾性ストッキングを履き、迎への看護師と一緒に歩いて手術室へ向かう。手術室のエリアに入ると不織布の帽子を被るよう渡された。さらに奥へ進み、手術室の台へも自分で上がり横たわる。麻酔医から説明があり、最後に執刀医が私に名前と手術内容について問うた。「子宮と卵管を取る」。医師は「そう」と頷いたあと正式な手術名を言ったと思う。そして、麻酔のせいかわ「のどが熱い気がする」と言ったあとふっと記憶がなくなった。目が覚めた時はリカバリ室で、時計は16:40 を指していた。視界がぼやけており、酷い頭痛と吐き気があり気持ち悪かった。少し経つとベッドごと病室へ運ばれた。その後は時間の経過がよく分からない。眠りと覚醒を繰り返していたと思うが、目が覚めると酷い頭痛と気持ち悪さで朦朧としていた。体勢を変えるたびに吐いた。看護師は何度も来てくれ、痛みが酷いときにこれを押すと点滴が早く落ちるから、と点滴につながるボタンを手に握らせてくれた。でも、何度も押すも効果は感じられなかった。出血があるので、ナプキンも替えてくれたのだが、そのありがたさを伝えるのもやっと。ようやく少し治まったとき、ス

マホで時間を確認すると夜中の1:40 だった。辛い一夜だった。

《術後3日間》

5/26、入院3 日目。朝、吐き気は治まったが、頭痛は続いていた。看護師2 人で着替えをしてくれ、ナプキンもまた替えてくれた。まだ自分一人で起き上がり着替えができる状態ではなかった。にもかかわらず、その数時間後には点滴のスタンドを引きずり、看護師の付き添いのもと数メートル先のトイレまで一步一步ゆっくりと歩いて行った。用を足すと便器が血で真っ赤に染まり驚いた。ズボンを上げると傷口にあたり痛かった。12 時、術後初めての食事。お粥と生姜焼き。久しぶりの食事だが、あまり食べられない。傷口は体を動かすと傷んだ。お腹に力が入れられず、横になると起き上がるのが大変で、ベッドの柵に掴まり腕の力で起き上がった。

5/27・28、入院4、5 日目。暇なので「白い巨塔」を読んだり、病院内をそろりそろりと散歩した。病院は田畑に囲まれていて、見晴らしが良かった。麦秋が広がっていた。

《退院》

5/29、入院6 日目。医師の診察。内診、エコーを受け、10 時退院。夫に迎えに来てもらった。ほっとした。

私は子を持たないと結婚時に夫と二人で決めていた。そう決めていたのは、今回の病気発覚の際に精神的ダメージが抑えられて良かったと思う。事実とこれからのことを意外とすんなりと受け入れられた。現在、腹腔鏡手術の傷跡が残るのみ。生理がないって楽だ。一部の人が感じるという子宮への喪失感もない。入院生活は、術後の辛さは別として、病院の設備の新しさや医療技術の進歩が興味深く、また栄養管理された温かな食事が上げ膳据え膳で出来るのが嬉しく、良い思い出となっている。

退院数日後、月下美人と数十年に一度しか咲かないと言われる観音竹が咲いた。花たちからの退院祝いかな。

